

二〇一五年度

中等部入学試験問題

国語 (60分間)

【注意】

- 1 問題は、一から三までです。
- 2 解答は、すべて別紙の解答用紙に記入しなさい。

【注意】 受験番号は、算用数字で横書きにすること。

受験番号				

氏名

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ひとつには母の血が、ひとつには家庭の雰囲気^{ふんいき}が、この少年をきわだたててひ弱にさせたのであろう。いかにももの静かだった母親から、少年は次のようなものを受け継いでいた。うすいもろい皮膚^{ひふ}、たどたどしい幾分^{いくぶん}ぼんやりした眼差し^{まなざし}、しまりのない口もとなどを。母にあってはむしろ魅力^{みんりき}であったそれらのものが、彼に受け継がれると、なぜとなく、いじけた、ひねこびたような印象を与えた。一見、おどおどした子鼠^{こねずみ}の表情を連想させた。

見かけどおりに少年は、なにかという扁桃腺^{へんとうせん}を腫らして高い熱を出したが、そういう場合にも、アスピリンの服用はかたく禁じられねばならなかった。この平凡な薬品^{へいぽん}ですら、彼の体の数箇所^{かずかしょ}に薬疹^{やくしん}の発赤^{はつせき}をうながしたからである。母親も同じようなアレルギー体質^{たいしつ}を持っていた。彼女は少年が生れるとほとんど同時にこの世を去ったが、それだけなお一層、おのが血液^{けつえき}をただ一人の子供にそそぎこんだのかも知れない。

親しみがたい、薄暗い^{うすくろい}、几帳面^{きちめん}に整えられた裏面^{うらめん}には避けがたい冷たさのしずんでいる家庭に、少年は暮^くしていた。父と子と、父の乳母^{うば}であつた老婆^{らうば}、愛嬌^{あいきやう}のない中年の女中、祖父と同郷の夜学に通っている書生^{しやうせい}、都合五人がこの家の住人であつた。

ごくたまに、親類の人々が訪れるときだけ、手品^{てひん}のようにこの家はにぎやかになる。彼らは掛軸^{かけどく}の一幅もまきあげるつもりでやってきて、申しあわせたように少年をかまい、お父さんに似て学者の相だと言ったりした。なるほど少年はたいていのとき黙りこくって目を伏せていたもので、それでも彼は問いかけられると大急ぎで返事をする。二言三言、それも語尾^{ごび}を飲みこんで

1

をつぐむたびに、いやな後味が薬品^{やくひん}のように

2

に残った。

少年にとつて最も好ましかったのは、一人で童話のたぐいに熱中するか、さもなくば年齢相応^{ねんれいそうおう}のおおまかな空想にふけっていることであつた。少年はさまざまな童話の主人公のなから、逆境にある者、虐げられる者、苛まれる者を選びだしては偏愛^{へんあい}した。彼らは自分の影をしつくりと受けいれてくれる容器^{ようき}だったからである。非常にしばしば、凍え死ぬマツチ売りの少女に、父母を失つて流浪^{りうろう}する少年に、彼の影はあやまたず重なりあう。すると、おかしいほど簡単に涙が両の目に溢れ、甘ずっぱい被虐^{ひぎやく}的な安らぎが小さな胸をくすぐった。

だが、次第^{しだい}にこのゆがめられた自己慰安^{じこゐあん}がすすむにつれ、少年はいつしか妄想^{むさう}にちかい観念^{くわんねん}を抱くようになっていた。そう、この世の一切^{いっさい}のものは、彼に悪意^{あくい}を持ち、機会^{きかい}さえあれば彼を陥れようと狙^{ねら}っているのだ。ことさら

3

4

を凝ら

しているのである。

ところで、妄想にまで固められたこの「悪意」なるものは、少年の場合、たまたまひとつの形に具象化^{くしやうか}されていた。ずいど昔、おそらくはなにかの絵本で見たものと思われる、痩せて骨ばった手の形態である。その像を少年ははつきり覚えていたわけではないが、ただ何者かを追うごとく差しのべられた青黒い手の、それよりもなにか象徴^{しやうてい}的に折り曲げられた五本の指の無気味な印象が、日と共に薄らぐどころか執拗^{しつごう}に頭にこびりつき、とめどなくふくらみあがつてきたのだった。黴^{かび}の匂^{にお}う壁に背をもたせているとき、もはや模様のわからぬ階段の絨毯^{じやうたん}を掌^{てのひら}でなでながらぼつねんと坐^{すわ}っているとき、ともすればその手の姿は少年の脳裏に現われてきた。ゆらめきながら夢想^{むさう}の奇怪^{きがい}な手は、彼をつかみ、暗い奈落^{ならく}へとひきずりこもうとする。折り曲り、ふしくれた指が、長く鉤^{かぎ}状^{じやう}にとがった爪が、どんな現実よりなましく官能^{かんのう}におしせまつた。

そんなとき、少年は拒むように

5

をちぢめ、ひくひくする口をうすくあげ、ある種の患者^{かんしや}を思わせるほど目をきつく見ひらいた。

少年の性質^{せいしやう}を案じたのは、父よりもむしろ彼の学習^{がくしゆ}を見てくれる律義^{りつぎ}一本の書生のほうであつた。

少年は発熱した。二日目に検温器の水銀は四十度を示し、熱にもてあそばれた少年は、終夜うなされつづけた。「ゆび、ゆび……」というようなうわ言^{うご}が聞きとられたのである。大量の解熱剤^{げねつざい}が与えられた。そのにがい散薬は彼の熱を急激にひき下げ、やつれた面に脂^{あぶら}い汗をうかばせた。それがどうかすると、目尻^{めじり}からにじみでた涙のように見えた。

一週間、少年は床についていた。十日目によく登校したが、途方^{とほう}にくれるほど学課^{がくか}が進んでいて、しかも翌日、苦手な算術の試験があることを告げられた。

食後、それでも少年は、自分の小部屋で教科書をひらいた。試験に悪い点をとることは、並はずれた小心さが許さない。

彼が習わなかった頁^{ぺい}には、七面倒な応用問題が並んでいた。リングとミカンをもらったり与えたりする問題、

少年は極端に鉛筆に力をこめ、紙のうえに図解をしたり数字を並べたりした。いくつかのリンゴの絵をかき、いくつかのミカンの形をかき、そのいくつかを消したりふやしたりしながら、無意識に鉛筆の尻を噛んでいた。真剣にかんがえこむとき、その顔はほとんど泣いているような表情となる。実際、なにかも放りだしたくなる虚脱感が、ややもするとおおいにかぶさってきた。

夜が更けまざった。突然、障子の紙に何者かのふれる音を聞いたような気がした。目をあげて、正面の障子にべったり貼りついている蜘蛛を少年は認めた。いやらしいほど大きな蜘蛛である。微細な毛を密生させた肢を八方にのばし、灰色の腹部をかすかに動かしている。

少年は青ざめた。彼はもつとも蜘蛛が厭わしかった。厭わしいどころか、見ただけで体がこわばり、悪寒が背筋に伝わってくる。ひろげられた蜘蛛の肢のさまが、あの
6
の印象に通ずるものを持っていたためかも知れない。すでに少年は身動きもならなかった。魔に似たおぞましい速さで走りだすそれを想像しただけで、身動きもできなかった。およそ一分ものあいだ、化石したように少年は、蜘蛛の姿を見すえていた。それから、ついに絶望的な反抗心をふるいおこし、そつと一枚の紙をとりあげ、中腰になって、障子のほうへ近づいた。蜘蛛は肢をのばしたままじっとしている。すぐそばまで手を近づけて、少年は鼻孔からわずかに息をした。体じゅうの皮膚がぞくぞくする。力一杯、ひと思いに紙をかぶせた。瞬間、蜘蛛は身をよじって隙間から脱けだし、ほとりと畳におちると、痛められた肢をひきずって走りだした。堰をきった勢いで、少年はとびついて紙でおさえた。掌に、総毛立つほどいやらしい蠢動が伝わる。それを、目をつぶっておしつぶした。とびのいて、まじまじとひらいた目で汚汁のにじんだ紙片を見つめた。長いこと小刻みに肩で息をした。ついで、机のうえの小刀をとりあげると、いらだたしく何べんも何べんも蜘蛛の尻を突き刺した。畳に切先が快くめりこむたびに、新しい恐怖と興奮が彼を鞭うった。

翌日の四時限目——答案用紙を前にした少年の態度は、目に立つほど平常と異なっていた。すぐそらしがちな臆病げな腫が、なにかすてばちな意志を秘めているかのようなであった。

そのとき、問題を配り終って教壇のほうへ引き返ししながら、担任の教師はこんなことを言った。昨日、別な学級でいやなことが起った。隣の生徒の答案を写した生徒がいてそれが露見した、というのである。

「みんなは、そんなことをして先生を困らせんでくれよ」

太い鉛色縁の眼鏡をかけた教師はおどけた口調でそう言い、小さな生徒たちは無心に笑った。しかし、その教師の言葉は、おもくろしい威圧となつて少年の耳を打った。彼はちらと視線をあげたが、教師の眼鏡がしらじらしく光り、まっすぐに自分を見つめているのを感じ、すぐに目を伏せた。

「やはりそうだ。先生はばくに注意したのだ。休んでいて問題ができるはずがないから、隣の答案を覗くと決めてしまっているのだ」

いじけた少年の観念は、即座にこんなふうに組立てられた。

問題は三題あった。はじめの二つは教科書にあったもので、少年もさして労することなく答を出すことができた。三番目が厄介で、まったく見知らぬ問題で、見当もつきかねた。

少年は焦りだした。鉛筆の尻をしきりと噛んだ。周囲から、鉛筆の走るかすかなひびきが、さざ波のように彼の耳を打つ。と、またしても被虐的な疑惑が、少年をおし包んだ。

誰一人かんがえこんでいる者なんていそうにない。おそらく彼が休んでいる間に、課外にでも習ったことのある問題なのだ。もちろんそうだ。彼一人が仲間外れになつてゐるのだ。こうかんがえると、教師をうらむ気持ち、自己を憐れむ気持ち、重なりあい、少年の胸を針のように刺した。

気落ちして、少年は机のうえの片手を動かした。と、答案の端にのついていた消しゴムが、生きもののようになり、おさえる間もなく机の下に落ちた。席あいの通路をころがって、そこで止まった。少年はおそろおそろ、教師の様子をうかがった。相手は教壇の上に立っていて、そのとき片手をあげて二本の指で眼鏡を直したが、度の強いレンズに反射した光が、あやまたず白々しく少年の目を射た。——やはりそうであった。教師は少年を疑っていて、今か今かと彼が怪しい身ぶりをするのを待ちかまえているのだ。

湿っぽい憤りが湧き上つてきて、ついでそれは昨夜、少年を襲ったような
7
に変じた。彼は下唇を噛み、汗ばんだ掌に鉛筆を握りしめた。おそろくどんな生徒にせよ、このときの少年ほど全身全霊をもって問題に没入することはなかったにちがいない。

まったく奇蹟としか思われぬことに、手のつけられなかった問題が少しづつほぐれてきた。しかし、時間も迫っていた。

夢中になって最後の計算をしながら、得体の知れぬおのきに少年は酔っていた。彼には、それと気のつかなかった能力があるのであった。教師が、全人類がいくら意地悪をしようとも、彼にはそれに打ち勝つ隠された力があるのだ。それももう一息、ほんの一息なのだ。

と、答を出す間際になって、そのまえの計算を錯覚していることに気がついた。書き直すには紙の余白が足りない。少年は消しゴムを拾おうと体を動かしかけたが、しかしそれがどのような動作として教師の目に映るかとかがえたと、一瞬にして奈落の底へ突き落とされる思いをした。そこで少年はほとんど気違いじみたiraだちで、指に唾をつけ、間違えた何行かの数字を消しはじめた。粗悪な紙は唾でこすられると、どす黒く汚れた。その上に無理に濃く書こうとすると、紙は三センチばかり縦に破れた。あたかも少年の狂おしい努力を嘲笑するかのよう。

悔しさと腹立ちと情けなさに、不意に涙が溢れてきて、答案が一面にばつとかすんだ。

かろうじて答を書きおえた瞬間、ベルが鳴った。答案が集められた。

憑かれた表情で、少年は後ろの席の級長をふりかえった。その生徒はなかなか算術が得意で、これまで一度も満点以外の点をもらったことがないのである。

「三番、答、なんて出た？」

「三番かい。十二本、だろ」

級長はあっさりそう答えた。

少年の顔が輝いた。彼はその感動をどうあつかってよいかわからなかった。唾を飲むと、さっと身をひるがえして、意味もなく机のふたを音高くあげた。それから、思いだしたように通路にかがみこみ、落ちている自分の消しゴムを拾いあげた。そして、その柔らかな、しなやかなゴムを、二つに折れるほど乱暴にねじ曲げてみた。

(北 杜夫の文章による)

- * 書生……他家に世話になって家事を手伝いながら勉学する者
- * 偏愛……あるものや人だけをかたよって愛すること
- * 被虐的……自分だけが心の苦しみを味わっているかのようにかえり自分自身に同情する状態
- * 自己慰安……自分で自分をなぐさめること
- * 具象化……はつきりしない状態のものを具体的なイメージに言い換えること
- * 奈落……ものごとのどん底や底知れない深い場所
- * 律儀……義理がたく実直なこと
- * 蠢動……虫などがうごめくこと
- * 憑かれた……何かにとりつかれたような

問1 1 5 に当てはまる言葉を次の中から選び、記号で答えなさい (同じ記号は二度使えないものとする)。

ア 目 イ 身 ウ 口 エ 舌 オ 胸 カ 耳

問2 ——線1「母にあつては印象を与えた」の説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 少年は母の血を受け継いで美に恵まれ、童話の主人公さながらの容姿が他人の目をひいた。
- イ 少年は生まれつき容姿に恵まれず、母とは似ても似つかないひねこびた印象を人に与えた。
- ウ 少年は美しい母に似てはいたが、それは彼のひ弱さを強調する作用しかもたらさなかった。
- エ 少年の容姿は母に似ていかにも病弱そうだったが、母のように同情を誘うことはなかった。
- オ 少年の表情には母の面かけは認められたが、母の容姿の欠点も受け継がれてしまっていた。

問3 ——線2「手品のように」の説明としてもつともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 暗く親しみたい家族に珍しく親類が訪れ元気づけられていることを「手品」に喩えている。
- イ 普段の静けさや暗さがまるで嘘のように急激に騒がしくなったことを「手品」に喩えている。
- ウ 親類の人々の思わぬ訪問に家族が無理をして機嫌をとっていることを「手品」に喩えている。
- エ 親類がやってきて大騒ぎしながら家を荒らし掛軸を盗んでいくことを「手品」に喩えている。
- オ 親類の訪問によってそれまで社交嫌いだった家族が明るくなることを「手品」に喩えている。

で答えなさい。

少年が愛して止まない童話の主人公たちが苦難を克服し、幸福を手中にする姿に励まされ心の安らぎを得ている。

まる漢字一字をうめる形で答えなさい。

被□妄想

線5 少年の性質を説明したものとして、最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

才 空想にふけりひたすら美的なものを追い求め、外部と関わろうとしない非社交的な性質

6
に当てはまる六字の言葉を文中からぬき出しなさい。

葉を文中からぬき出しなさい（マスのは数は字数を表す）。

少年が蜘蛛を前に
がとれない様子

選び、記号で答えなさい。

ではないかとおののいている。

るのではないかと恐れている。

られたものと受けとめている。

何か怪しいものを感じている。

いからだとほくそえんでいる。

なさい（マスのは数は字数を表す）。

少年が
ときに見せるしぐさ

問11 ―線9「被虐的な疑惑」とあるが、これ以降、少年が次々と「疑惑」にとらわれていく過程にそって、次のア

才を順番に並びかえ、記号で答えなさい（ただし、前から三番目にはアが入るものとする）。

ア 教師は自分を疑っていて、怪しい身ぶりをするのを今か今かと待ちかまえているのではないか。

イ かろうじて難を逃れはしたものの、依然として全人類が自分に悪意を抱いているのではないか。

ウ 教師は自分を注視しており、消しゴムが転がっただけでもカンニングだとみなすのではないか。

エ 自分以外の全員があらかじめ解法を習っており、苦もなく試験に取り組んでいるのではないか。

オ 消しゴムを拾おうとする動きが教師の目には隣の答案を覗く行為に映ってしまうのではないか。

問12 ―線10「相手」という言葉には、少年のどういう気持ちが表示されているか。もっともふさわしいものを次の中

ら選び、記号で答えなさい。

ア 「相手」という言葉によって少年が教師との間に一線を引いていることが暗に示されており、少年の教師に対する敵意がうかがえる。

イ 「相手」という言葉によって少年が教師をもともと軽視していることが暗に示されており、少年の教師に対する反抗心がうかがえる。

ウ 「相手」という言葉によって少年と教師の対立が激しくなっていることが暗に示されており、少年と教師の間の深い溝がうかがえる。

エ 「相手」という言葉によって少年が教師の意地の悪さに気づいたことが暗に示されており、少年の教師に対する不信感がうかがえる。

オ 「相手」という言葉によって少年が教師に親しみをもっていることが暗に示されており、少年と教師の結びつきの深さがうかがえる。

問13 7 に当てはまる七字の言葉を文中からぬき出しなさい。

問14 ―線11「そして、その柔らかない、うねり曲げてみた」からうかがえる少年の心情について説明したものとして

適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 消しゴムが転がったせいで疑いをかけられ迷惑をこうむったので、消しゴムに怒りをぶつけている。

イ 教師の視線を意識しつつも難問を解決し、急激に緊張感から解放されたことで感情が高ぶっている。

ウ 自己に潜む能力に目覚め自信が湧くと同時に、教師の誤解を解くこともでき達成感に包まれている。

エ 自分を脅かす悪意が消しゴムにも宿っていると思い込み、腕力でねじ伏せようと躍起になっている。

オ 難問を前にこれまで意識したことなかった能力を発揮し、正解を得られたことで勢いづいている。

カ 難問を解決できたことでそれまでの自分の思い込みの誤りにも気づき、ばつの悪い思いをしている。

問15 この文章の内容に合致するものとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 物語の世界に住み現実が目に入らない少年であったが、算数の試験をきっかけに教師に苛められていることに気づき、すてばちな気持ちから紙を破ったり消しゴムをねじったりと次第に持ち前の荒々しさが表に出てきている。

イ 自分を悲劇的な存在であると思ひこむ少年の妄想は次第にエスカレートし、ついには教師の言葉や態度にまで悪意を見出すようになるが、追いつめられた状況の中それまで思い描いたことのなかった自分が顔を覗かせている。

ウ 物語の世界に閉じこもり少年の孤独はその度合いを深めていたが、発熱し追いつめられた状況で苦手な算数に取り組み、何とか解答を割り出したことをきっかけに、級友ともコミュニケーションがとれるまでに成長している。

エ 自分の像を悲劇の主人公に重ねることに喜びすら見出していた少年であったが、苦手な算数を相手に悪戦苦闘する中、自分に思わぬ能力が潜んでいたことに気づき、同時に周囲に対して抱いていた妄想からも解放されている。

オ 自分を虐げられる者の側に置き、悲劇の主人公になぞらえることに快感すら覚えていた少年であったが、算数の試験で非凡な才能を発揮できたことで調子に乗り、全人類を従わせることができるかのような錯覚に陥っている。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(文の上のⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳは、問題を解くために必要な記号である。例えば、Ⅰは文章の一行目から十七行目までの範囲を示すものとする。)

Ⅰ 経済学の重要な目的の一つに、ものやサービスの価格がどのように決まるかを明らかにすることがある。ここに、ものとは目に見えるものをいい、サービスとは目に見えないものをいう。例えば、鉄道に乗ることは、鉄道輸送という目に見えないものを消費することなので、そのとき消費するものを鉄道サービスとか、鉄道輸送サービスという。

そもそも、ものやサービスに価格がついているのはなぜだろうか。ただでは売ろうとする人がいないからだというのが正解のように思われる。これは八割方正解といえるが、必ずしも当てはまらない場合がある。①「私たちは毎日のように道路を歩いているが、通行料という価格に相当するものを取られることはない。道路はただで利用できるのである。」②「自動車で高速道路を走ろうとすると、高速道路料金を取られる。鉄道を利用する場合には、切符を買うか定期券を購入するかしなければ、改札口を通してくれない。」③「絶対に座りたければ、乗車券に加えて座席指定券も買わなければならない。」

右の例から、ものやサービスに価格がついているのは、その利用を誰か特定の人限定するためであるといえそうである。普通の道路は誰が歩いてもかまわないから通行料金を取られないが、高速道路は通行料金を払う人へのみその利用を許可している。④「高速道路の通行料金はそれを支払う人にだけ高速道路の利用を限定するために存在しているといえるだろう。同じように、鉄道の座席指定券も座席の利用を座席指定券を買った人に限定するために存在するといえる。」

価格は「誰が」「何を」「どれだけ」消費するかを決める手段の一つであるが、一般に、価格が上昇すると消費しようとする人は減少し、逆に価格が低下すると消費しようとする人は増加する。この原理を応用すると、収容能力が一定である場合の混雑の度合いを価格によって調整することができる。

Ⅱ 例えば、鉄道車両の座席数には限りがあるが、座席指定車やグリーン車については、料金は自由席よりも高いが、座席指定券やグリーン車券は座席数しか発売されないで、それらを購入すれば必ず座席を確保でき、車内も空いている。それに対して、自由席車は混んでいる時が多く、必ず座れるという保証もない。座席指定制のない首都圏の通勤電車などは、四六時中混んでいて、快適には程遠い状況である。

ここで注目すべきは、座席指定車(グリーン車を除く)と自由席車とで鉄道会社にとって鉄道サービスを供給するうえで費用に差はないという点である。供給するうえで費用がかかるものやサービスほど、その価格は高くなるというのが常識であろう。そうだとすれば、座席指定車の利用料金の方が、自由席車のそれよりも高いことは、この常識に反している。それにもかかわらず、鉄道利用者たちはこの料金差に文句をつけない。それは鉄道利用者たちが、鉄道サービスの供給費用に変わりはないけれども、座って快適に旅行したいと思ったら、自由席車よりも高い料金を支払わなければならないことを理解しているからであろう。すなわち、このケースでは、人々は価格は **A** を調整する手段の一つであることを理解しているといつてよい。

ところが、高速道路の通行料金となると、利用者の反応は違ってくる。たまたま、筆者の手に雑誌があるが、その中に「高速道路通行料金、償還すんでも値上げ一直線の不思議」という記事がある。同記事は「新幹線や飛行機よりも割高で、ギネスブックもびつくりの高速道路の通行料金がまた値上げされそうだ」と述べて、「いつも大渋滞の道で、お上が年貢を取るやり方だ」という一利用者の憤慨の声を取り上げている。

ここで示されている常識は、「**B**」というものであり、「**C**」というものである。つまり「前者は供給者にとって費用のかからないものの価格はゼロにすべき」という常識であり、後者は混雑していてサービスが悪いのに価格を引き上げるのは理屈が通らない」という常識である。

これら二つの常識は、供給者にとって「特別の費用がかからなくても、混雑がなく座席が必ず確保できる座席指定車」の方が、「混雑していて必ずしも座席が確保できない自由席車」よりも高いことに理解を示す人たちと同じ人たちの常識なのである。同じ人たちが、このように全く異なる常識を示しているながら、矛盾していることに少しも気づかないのはなぜだろうか。

Ⅲ 価格とは、ものやサービスを誰にどれだけ分配するかを決める手段の一つだということを理解すれば、大渋滞だからこそ高速道路の通行料金を引き上げる必要があることが理解されるはずである。償還が済んだからといって無料開放す

れば、高速道路を利用しようとするドライバーは一層増えて、高速道路はますます渋滞するだろう。その場合には、無料で走れる一般道路を走っても、無料で走れる高速道路を走っても、目的地までの到達時間が同じになる水準まで、どちらの道路も渋滞するはずである。それに対して、高速道路の通行料金を引き上げれば引き上げるほど、利用者は減っていき、高速道路の渋滞は緩和されるだろう。しかし、高速道路の通行料金を上げれば上げるほど、他方で、一般道路は通行料金という利用者を限定する機能を持たないためにますます渋滞する。これでは一方の問題を、他方の問題の悪化を犠牲にして解決することになる。このような他方の犠牲を伴うことなく高速道路の渋滞を解決する方法は、値上げした高速道路の通行料金で、高速道路を拡張したり、代替的な高速道路を建設することである。実際に、日本道路公団は東名高速の通行料金を引き上げ、そこで得た収入で第二東名高速を建設しようとしている。

価格はそのサービスの利用を誰かに限定する働きをすると述べた。そのうち、ものについては、価格を払えば利用だけでなく所有も可能になる場合も少なくない。耐久性のないものは利用と所有を区別することに意味はないが、自動車や住宅や土地のように耐久性があるものについては、利用者と所有者は必ず一致する。これらのものについては、所有せずにお金を払って借りて利用することも可能である。もちろん、お金を払って所有し、自ら利用することもできる。このようにかかると、価格は利用権と所有権を誰かに与えるという機能を持っているといえる。

私たちの社会では、お金さえ払えば、つまり、価格さえ払えば、実に多くのものが手に入る。ということは、金持ちほど多くのものを手に入れることができるということである。

ものやサービスの使用者やものの所有者を決める価格以外の手段としては、試験や早い者勝ちや抽選や縁故（コネ）などがある。しかし、私たちの社会ではなんといっても多いのは価格によるものである。それでは、私たちの社会では、なぜ金持ちほど得をする価格による方法が、利用者や所有者を決定する一般的な手段として利用されているのだろうか。この点を未開社会との比較でかんがえてみよう。

Ⅳ 未開社会では、人々は狩猟で獲れた鳥獣や魚を平等に分け合う。ここでは、金持ちほどたくさん獲物を手に入れるといったことはない。こういう社会は今日でもアマゾンの奥地のインディオの社会のように、地球上の一部地域に存在しており、時折、テレビのドキュメンタリー番組などで紹介され、「ケンカもなく、すべてを平等に分け合っています」などというナレーションが入る。このナレーションは、明らかに私たちの不平等な競争社会との対比を意識している。しかし、実は未開社会でも、ただでは平等な分け前にあずかることはできない。平等な分け前にあずかることができるのは、狩りに関する平等な働きが前提になっているからである。つまり、未開社会では、直接的な労働サービス（狩り）の提供が、獲物の分配手段として利用されているのである。しかし、同じように働いても、獲れた獲物には人によって差がつく。この差が獲物の分け前に反映されず、一匹も獲物を獲らなかった者にも平等な分け前が与えられるとなると、人々は狩りに関して怠けはしないだろうか。一人くらい怠けても問題は無いが、怠ける者が多くなると獲物が減ってしまい、未開社会そのものの存在が危うくなる。したがってこの問題は無視できない。

未開社会がこの問題を解決する方法は、社会的な名誉というアメと、不名誉というムチとを使い分けることである。獲物の多い者は讃えられ、少ない者は馬鹿にされる。このような社会的な賞賛（アメ）と軽蔑（ムチ）という共同体規制が、未開社会において、分け前は平等でも、人々が怠けずに働くように動機づける仕組みである。

私たちの社会でも、社会的な賞賛と軽蔑が人々を勤勉や努力へと駆り立てる側面がないわけではない。しかし、それは主流ではない。私たちの社会では、勤勉でなかったり、努力を怠ったりすると、分け前が少なくなるということが人々を勤勉や努力へと駆り立てる主たる仕組みである。私たちの社会では、高い価値を支払える者が、より多くのものやサービスを消費することができる場合（すなわち、価格による分配）が圧倒的に多い。このような社会では、人々は他人よりもより多くを支払うことによって、より多くのものやサービスを手に入れることができる人間になろうとして、より一生懸命に働くようになる。

このように、価格による利用者や所有者の決定方法には、人々から勤勉や努力を引き出す誘因がある。市場経済とは価格の持つこの誘因機能をうまく利用して、経済の成長・発展を目指す経済といってもよい。

未開社会も、私たちの社会も、異なっているが、ともに私たちから勤勉・努力を引き出す仕組みを持っている。社会が存続するためには、そうした仕組みが必要だからである。未開社会では働いた結果が悪くても同じように消費できるが、そういう人は他人から蔑まれる。それに対して、私たちの社会では蔑まれはしないが、（ ）なる。読者はどちらの仕組みをより好ましいと思われるだろうか。

- * 経済学……人間の共同生活の基本をなす財産の運用やものの価値のあり方について研究すること
- * 供給……要求や必要に応じて、ものを用意すること
- * 償還……借りたものを返すこと
- * 憤慨……ひどく腹を立てること
- * 拡幅……道路などの幅を広げること
- * 代替……他のもので代えること
- * 耐久……長く持ちこたえること
- * 縁故……人と人とのかわりあい
- * 誘因……ある作用を引き起こす原因

問1 「①」「④」に入るのにもっともふさわしい言葉を、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい(同じ記号は二度使えないものとする)。

- ア ところが イ さらに ウ したがって エ ところで オ 例えば

問2 ―線1「鉄道輸送という目に見えないものを消費する」とあるが、人々が「鉄道輸送」に対して期待している内容に当てはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 鉄道を使うことで渋滞に巻きこまれずに目的地に行くことができる。
 イ 鉄道を使うことで自分で運転することなく疲れずに移動できる。
 ウ 鉄道を使うことで食べ物を車内販売で移動中に購入できる。
 エ 鉄道を使うことで約束の時間に遅れることなく到着できる。
 オ 鉄道を使うことで事故にあわずに安全に目的地に向かうことができる。

問3 ―線2「ものやサービスに価格がついているのはなぜだろうか」とあるが、その理由を次のように説明した。() に入るのにもっともふさわしい表現を、Iの文中から十六字でぬき出し、最初の四字を答えなさい(句読点等の記号も一字とする)。

ものやサービスに価格をつけることで、() ことが可能になるから。

問4 ―線3「座席指定車の利用料金の方が、自由席車のそれよりも高いことは、この常識に反している」という部分^①を次のように説明した。次の文の() に入るのにもっともふさわしい表現を、IIの文中から十一字でぬき出し、最初の四字を答えなさい(句読点等の記号も一字とする)。

() が同じであるのに、料金差が発生してしまうことはおかしい。

問5 A に入るのにもっともふさわしい表現を、Iの文中から五字以上十字以内でぬき出しなさい(句読点等の記号も一字とする)。

問6 B、C に入るのにもっともふさわしい表現を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 大渋滞でサービスが悪いのに通行料金を上げないのは非常識だ
 イ 大渋滞でサービスが悪いのに通行料金を上げないのは不思議だ
 ウ 大渋滞でサービスが悪いのに通行料金を上げるのはけしからん
 エ 大渋滞でサービスが悪いのに通行料金を上げるのはやむをえない
 オ 人件費、修繕費用^{しやうぜん}など維持費^{いじ}はすでに通行料金で全額、償還済みだ。本来なら、無料開放されている
 カ 人件費、修繕費用など維持費はすでに通行料金で全額、償還済みだ。本来なら、通行料金を下げた方がいい
 キ 建設費、借入利息など総費用はすでに通行料金で全額、償還済みだ。本来なら、無料開放されている
 ク 建設費、借入利息など総費用はすでに通行料金で全額、償還済みだ。本来なら、通行料金を下げた方がいい

問7 — 線4「矛盾している」とあるが、どのような状態を表しているのか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 高速道路で渋滞が起こっていることに気付いている人が、その問題をどのように解決するのかということをかんがえもせずに放置している。

イ 高速道路の通行料金が下がることを望んでいる人が、それと同時に、鉄道においても座席指定券の料金が下がることを期待している。

ウ 高速道路で渋滞が起こらなくなることを求めている人が、高速道路での渋滞を解消させるためにかんがえた対策に反対している。

エ 高速道路で受けられるサービスが改善されないことに文句を言っている人が、通行料金を無料にするべきだと主張している。

オ 高速道路の通行料金が上がることに對して不満を持っている人が、鉄道を利用するときには座席指定券の料金を自ら進んで支払っている。

問8 — 線5「一方の問題」、6「他方の問題」に当てはまるものを、それぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 一般道路が渋滞するという問題

イ 一般道路の通行料金が発生するという問題

ウ 一般道路の利用者が減ってしまうという問題

エ 高速道路が渋滞するという問題

オ 高速道路の通行料金が上がるという問題

カ 高速道路の利用者が減ってしまうという問題

キ 一般道路でも高速道路でも目的地までの到達時間が同じになるという問題

ク 一般道路も高速道路も渋滞するという問題

問9 — 線7「東名高速の通行料金を引き上げ、そこで得た収入で第二東名高速を建設しようとしている」とあるが、これによってもたらされる良い点を次のように説明した。次の文の()に入るのにもっともふさわしい表現を、Iの文中から四字でぬき出しなさい(句読点等の記号も一字とする)。

高速道路の()が上がり、利用者がより空いた道路をより早く快適に走れるようになる。

問10 本文の内容からかんがえて、——線ア、オの中には一つ間違いがある。それを選び、記号で答えなさい。

問11 — 線8「不平等な競争社会」のことを次のように説明した。次の文の()に入るのにもっともふさわしい表現を、Ⅲの文中から五字以上十字以内でぬき出しなさい(句読点等の記号も一字とする)。

() 社会。

問12 — 線9「この問題」について、次の問いに答えなさい。

(1) その内容を次のように説明した。次の文の(1) (2) (3)に入るのにもっともふさわしい表現を、それぞれⅣの文中から指定された字数でぬき出しなさい(句読点等の記号も一字とする)。また、(A)に入るのにもっともふさわしい表現を、後のア、カから選び、記号で答えなさい。

未開社会では、すべての者が(1・五字)をしていなくても、(2・六字)を手に入れることになる。この状態のままだと(A)ので、最終的には(3・四字)が非常に多くなる危険性がある。

ア 働かない者が賞賛される

イ 働かない者が損をする

ウ 働かない者が軽蔑される

エ 働いている者が賞賛される

オ 働いている者が損をする

カ 働いている者が軽蔑される

(2) それを解決するものは何か。Ⅳの文中から九字でぬき出しなさい(句読点等の記号も一字とする)。

問13

——線10「私たちの社会では蔑まれはしないが、（ ）なる」とあるが、（ ）に入るのにもっともふさわしい表現を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 休日返上でずっと働き続けなければならなく
- イ 消費しようという意欲がなくなり労働自体もしなく
- ウ 労働時間が少なくなるので集中して働くように
- エ 所得が少なくなることもなく怠け続けるように
- オ 所得が少なくなつて消費できる量が少なく

問14

本文中の内容に合致するものとしてふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 現代社会の人々は、ものやサービスをたくさん手に入れて、今より豊かに暮らそうと日々の労働にはげんでいるので、他人からどう思われるかということを気にするゆとりはない。
- イ ものやサービスは、必要とする人が多くなれば多くなるほど大量生産されるようになるので、その価格はどんどん安くなり、消費活動が活発になる。
- ウ 現代社会においては、目に見える分かりやすいものが重視されるので、定期券のようによりお得感のあるサービスを人々は求めるようになっていく。
- エ ものやサービスの利用者や所有者を決める手段は、試験や抽選や縁故など様々なものがあるが、私たちの社会で一番多く用いられている手段は価格によるものである。
- オ インデリオの社会と私たちの社会とで共通する点は、そこで暮らしている人々が積極的に労働し続けるような仕組みがそれぞれの社会に存在していることである。
- カ 現代社会では何事においても過程が重視されるので、良い結果であっても悪い結果であっても、がんばって働いているのならば社会的な名誉を手にすることができる。

三 次の1～8の文中にある——線のカタカナを漢字に直しなさい。

- | | |
|---|--|
| 1 会社のカンレイに従って行動する。 | 2 お盆 <small>ぼん</small> の時期に郷里にキセイする。 |
| 3 彼の努力によりギョウセキが上がった。 | 4 経済問題についてコウサツを述べる。 |
| 5 運転免許 <small>めんきょ</small> をシユトクすることができた。 | 6 誕生日会に友達をシヨウタイする。 |
| 7 歴史のセンモン家のお話を聞いてみる。 | 8 最後の試合でユウシユウの美 <small>かど</small> を飾る。 |

〔以下 余白〕